人間と阿弥陀仏の時間・空間における関わり

―親鸞浄土教における人間観―

新井俊一（相愛大学名誉教授）

（日本佛教学会 2016 年度学術大会発表要旨）

人間は時間と空間の中で、様々な欲望の支配下にあって、周囲と相克を繰り返しながら、有限の命を生きている。その有様を親鸞は、「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもつてそらごとたはごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」（歎異抄後序）と言った。親鸞の人間観は、と言えば、この文の前半「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもつてそらごとたはごとまことあることなし」に収まってしまうのであるが、最後の「ただ念仏のみぞまことにておはします」の一句によって、全法界を覆う如来の本願の対象としての衆生の姿が示される。

浄土教では、人間と阿弥陀仏の関係が最高の関心事である。阿弥陀仏が無量寿と無量光の二つの属性を持つとされるように、阿弥陀仏は時間と空間において人間と関わりながら、人間を苦悩から救おうとする。そこで小論では、苦悩の人間が生きる時間を通時的時間とし、阿弥陀仏の時間を共時的時間または超越時間として、浄土往生が起こるのは時間が前者から後者に移る時であることを論述したい。

通時的時間とは、過去から現在・未来にかけて進む不可逆的時間であり、それには循環的時間と直線的時間が含まれる。循環的時間とは、六道輪廻という言葉で表されるように、衆生が同じ類型の人生経路を繰り返すことである。これは迷いの深さを表すと同時に、命の相関性をも表す。覚者の側も「八相成道」という言葉で表されるように、苦悩の衆生を救うために、輪廻に似た命の循環を経過する。直線的時間とは、三時思想（末法思想）で代表されるように、釈尊から時代が経つに従って、人間の質や能力が落ち、社会もますます乱れ、道徳も地に落ちていく、という観点である。こうした不可逆的時間の中にどっぷりとつかっている人間は、その時その時の現象に心を奪われながら浮沈を繰り返す。

共時的時間とは、上記の通時的時間を超越して、過去・現在・未来を一望の下に見ることのできる状態である。それは全ての執着や相克を解脱した状態であるから、如来の時間、不変の現在の時間、と言うことができる。

結論として言えることは、人間は通常はその時その時の事象に反応しながら、不可逆的な通時的時間に生きて苦悩を重ねているが、阿弥陀仏の本願の働きに目覚めるときに、如来の超越時間に出遇い、この世の命が終わるときに、完全に如来の時間に合一する。それが往生浄土であり、そういう可能性を秘めた命を生きているのが人間なのである。